

デカルトと懐疑論の問題を再考する

筒井一穂(東京大学)

懐疑論に対抗しうる確実な真理を発見し、これを学問の基盤とすること、これこそデカルトが少なくともその後半生を投じた課題のひとつであるという見解に、よもや異見はあるまい。しかしそれでは、デカルトはどのような理路を巡って懐疑論を斥け、その後どのような場所に到ったのか。

この問いに関して通説となっている見解は、R. Popkin (*History of Scepticism*, 1960)が呈示したものである。Popkinは、事物の本性についての知識をわれわれが持ちうるとする立場を「独断論 dogmatism」と呼び、反対に事物の本性についての認識が不可能であるとする立場を「徹底的懐疑論」と呼ぶ。17世紀には、ピュロン主義に由来する懐疑論が再興し、これに対する幾多の抵抗や妥協が試みられたのだが、遂に決定的な勝利を収めた功労者がデカルトであるとされる。

Popkinの筆による、いまやすっかり人口に膾炙したデカルトの肖像は、同時代には英雄的な輝きを放つにしても、今日のわれわれにとっては古色蒼然の観がある。事実、懐疑論への根本的な抗弁をデカルトに探ろうとする度ごとに、救い難い循環や納得し難い証明の前に解釈者たちは頭を抱えてきたのであり、その状況は今日なお決定的な好転をみない。

しかし、こうした諸困難の発端はデカルトを英雄的で徹底的な独断論者とする見方に存するが、思うにこの見方そのものが定かではない。いまだこの点が明瞭でないのは、デカルトの懐疑の構造に関する汗牛充棟の研究のかたわら、その乗り越え方についての議論がこれまで十分に交わされてこなかったことに因由するように思われるが、いずれにせよこの点を精査することを通じて、これまで脚光を浴びてこなかったデカルト哲学の根底的な非独断論的性格を浮き彫りにすることができるのであって、それこそが本発表のねらいとなる。本発表はいわば節度ある独断論(moderate dogmatism)としてデカルト哲学を特徴付けるものなのだが、今度はそれがどのようなものであるかを積極的に語り直すのが当然であろう。けれどもこうした課題に同時に一度に手を付けることはできないので、本発表はもっぱらデカルトが何からどのように峻別されるべきであるかを考察し、その大枠を絞り込むことに傾注する。すなわち、いくつかのテキスト的証拠と事柄に即した解釈とによって、デカルトが根底的には独断論的ではなく、むしろ懐疑論に類似した傾向をさえ有していることを示すことに専念する。

本発表の概要は以下の通り。(1)デカルトを独断論者とみなすことの主要な根拠を確認する。わけても決定的な論拠は、『省察』が欺く神の仮説(VII, 21-23)¹⁾において可能な限り最も強く普遍的な疑いを呈示し、これを克服したのであるから、いわんや徹底的な懐疑論もまた克服されているはずだ、というものだろう。この論拠はひとえに、欺く神の仮説が徹底的懐疑論と同じかそれ以上に強力かつ広範な疑いを扱うとみなすことに依存する。

(2)しかし、欺く神の仮説と徹底的懐疑論と、双方の議論の水準の相異を考慮すれば、両者を等閑視するのは軽率であろう。というのも、一方で徹底的懐疑論は「事物の本性(ないしそれを統制する神の力能)は、われわれの認識能力によっては把握できない」と述べ立てるのであるが、他方で欺く神の懐

疑は(すでいくつかの先行研究が示しているように)、「われわれが明証的に認識するものが、実際には偽であるということがあるだろうか」、あるいは「われわれは認識される事柄の真偽を判定する基準を認識内部で手にすることはできないのではないか」との疑念にのみ焦点を集めているからである。したがって、欺く神の懐疑が払拭されたときわれわれに与えられるのは、明証的に知られるものが真であることの保証のみであって、それが神の目からみても真であるということの保証ではありえない。その限りで、神の力能を持ち出す徹底的懐疑論は、少なくともこのような議論によって超克することのできるものではない。

(3)徹底的懐疑論を相手にするとき問題なのは、われわれの明証知が神からみて偽である可能性をいかにして排除するかである。こうした問題がデカルトによって展開される場面としてまず注目されるべきテキストは「第二答弁」にある。そこでデカルトは、こうした可能性を「絶対的虚偽」の想定として位置付けつつ、これをそもそも問われる価値のないものとして斥けている(VII, 144-145)。加えて「第六答弁」においても、これに類似した状況を描写しながらも、絶対的虚偽を神が生じさせる事態がもとよりわれわれには理解不可能であるとした上で、理解不可能であるものを根拠にして理解可能なもの(この場合は具体的に明証知)を疑うことを不合理として一蹴する(VII, 436)。これらのテキストから、われわれは、徹底的懐疑論へのデカルト的対応を次のようにまとめる。第一に、徹底的懐疑論はその立論において虚偽が指摘されるような仕方(論駁)されてはいない。第二に、われわれに明証的に認識されたものの真理性をどうにか疑おうとすることそのものが(虚偽ではなくむしろ)無意味ないし無価値とされる、すなわち、哲学的な探究の範囲外に置かれる。

(4)ところで、徹底的懐疑論を無意味であるとする哲学的な背景はどのようなものか。その点について考察を深めるため、『第六省察』の冒頭において、物体的事物の实在可能性を論じながら、われわれの明証知に矛盾するような特性を神が物体に植え込むことは「ありえないとは判断できない」とデカルトが述べる箇所に着目する(VII, 71)。要点は、そうした矛盾するもの实在可能性の問題についてデカルトが「第四省察」的判斷論を基にして、われわれに判断可能な(つまり肯定か否定が可能な)ものどもの範疇から明証知に矛盾するものを放逐していることにある。ここで判断可能なものの範疇は、そのまま認識可能なものの範疇であり、同時に、われわれがそれについて有意義な哲学的探究を行うことのできるものの範囲であると考えることができよう。こうして、神の力能とわれわれの認識能力とについての熟考を通じて、認識可能なものの内部においては独断論的な語り(論)が許容されることになるのだが、反対に、その外部で徹底的懐疑論が提示する問題は、あくまでも判断停止をもって応答されることになる。

以上より、『省察』の根底において非独断論、あるいは節度ある独断論が働いていることが示される。こうしてわれわれは、Popkin的な解釈がデカルトに押し付けた(おそらくは不当な)重荷を下すと同時に、懐疑主義とデカルト哲学とを、これまで以上に微妙な関係でもって新たに結び結ぶことになる。²⁾デカルトの参照にあたって、簡略のため以下の全集の巻号をローマ数字で、頁数を順にアラビア数字で記した。R. Descartes.1996. (*Œuvres de Descartes*, C. Adam and P. Tannery (eds.), Vrin.